国語総合

次の文章は、勝又基『親孝行の日本史』からの一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、原則として句読点やカッコは一字に数えます。

A 江戸時代に入ると、社会に対する儒教の影響力が格段に大きくなりました。とくに慶長十二年（一六〇七）、徳川家康が侍講として朱子学者・林羅山を召し抱えたのをはじめとして、大名ら為政者の多くが朱子学を重んじて政治に取り入れたため、社会全体に広まりました。必然的に孝思想も重んじられ、孝の全盛期とも言うべき時代を迎えます。

たとえばこの時代には、数多くの教訓書が書かれました。一口に教訓書と言っても、大名の子女に宛てて書かれた写本から、ひろく庶民を教育するために出版されたものまで、在り方は多様でした。(あ)それらのことごとくで孝は説かれ、各階層に浸透(a)する役割を果たしました。また平安時代に行われていた孝行者の表彰が復活し、頻繁(b)に行われるようになりました。

江戸時代の特色の一つは、表彰に関わる歴史資料や伝記が多く残っていることです。(い)これらをひもとくことで、孝子がどのような手順を経て表彰されたか、ということが詳しく分かります。江戸時代の通時的な展開について詳しく見る前に、中村五郎右衛門という孝子を取り上げて、表彰の実態を眺めてみたいと思います。五郎右衛門は、徳川将軍からはじめて表彰された孝行者です。彼には『駿州今泉村五郎右衛門儀ニ付江戸ニ而諸事覚書』というゼッコウ(ア)の資料が残っています。これは、五郎右衛門が幕府の巡検使によって見出され、取り調べを受け、江戸に呼ばれ、表彰されるまでの事情を事細かに記したものです。これにホソク(イ)説明をして行く形で読み進めながら、江戸時代の表彰がどのようなものであったかを見てゆきましょう。

延宝九年（一六八一）、諸国に巡検使が派遣されました。駿河国筋担当は渡部久助、宮崎七郎右衛門の二名でした。四月四日、比(ひ)奈村(な)（現・静岡県富士市）へ泊まった巡検使は、宿泊所に今泉村（現・静岡県富士市）の住人・五郎右衛門を呼び寄せて、「お前は孝行者

で民に施しもするそうだが、本当か」と尋ねました。

巡検使というのは、領内の民情を視察するために、幕府や藩が遣わす役人です。孝行者はこのような見回りの際に見出されることが多かったようです。他にはたとえば、後述する岡山藩主・池田光政（いけだみつまさ）のように、大名が各地から孝子善人を書上げさせる方法などもありました。

取り調べはどのようになされたのでしょうか。「お前は孝行者だそうだが本当か」と尋ねる巡検使に対して、五郎右衛門は次のように答えました。

……母親が生きている内、子供の中でとくに私を可愛がって、「子供の中では五郎右衛門だけが親孝行してくれる」などと言っていました、それを聞いた人が信じ込んで世間に言いふらしたのでしょうか。もちろん孝行をしたいという気持ちは持っておりますが、孝行をしたということは全くございません。このように尋ねられることは迷惑でございます。

自分が孝行者なんてとんでもない、と否定しています。しかし土地の人々が五郎右衛門の孝を称[c]えるので、巡検使たちは帳面に五郎右衛門の名前を書き付けました。五郎右衛門は巡検使たちの後を追いかけ、本当に良いことなどしていないので、帳面から消して下さいとお願いしました。しかし、その姿が却って殊勝だと、それ[う]も帳面につけてしまいました。

孝行者というのは、[B]えてして謙虚なものです。「私は孝行をしたのだから表彰しろ」などと言う者はそういません。右のようなやりとりは、孝子伝にはしばしば見られるものです。

翌年の天和二年（一六八二）二月二十九日、その土地をオサ[ウ]める代官のところへ、江戸城の勘定奉行三名による連名の書状が来ました。老中がお呼びだから、五郎右衛門を至急江戸城へ連れて参れ、との内容でした。五郎右衛門は三月三日に家を出て、二日かけて江戸に着きました。

江戸へ着くとさっそく月番の勘定奉行による取り調べが始まりました。五郎右衛門は相変わらず自分は孝行者ではないと主張し

ます。その中で五郎右衛門は、「自分は不孝はしたことはあるが、孝行はしたことがありません」と答えました。聞いた奉行が、不孝とはどのようなことか、と尋ねると、五郎右衛門は、

二十年前、庚申(こうしん)待ちへ親と行ったのに、先に帰宅し、掛け金をかけてねてしまいました。後から帰宅した親は仕方なく垣根を破って入り、あとで大層叱られました。

と答えました。これを聞いた奉行は、

そのようなことはよくある。これを不孝の第一として二十年もの間忘れずにいたことで、お前の性格が全て分かる。もはや聞くまでもない。

と、取り調べを終えてしまいました。ちょっとした頓知(C)噺のような結末です。しかし勘定奉行としても、巡検使の報告を受けて江戸まで呼んでしまった以上、もう「こいつは自分で言う通りの不孝者だ」と追い返すこともできなかったのかもしれません。「なんとかして五郎右衛門の孝行な点を探そう」というゴウイン(エ)な姿勢も見えるようです。五郎右衛門としては、自分は親孝行などしていないと言い続けていたはずなのに、いつのまにか孝行者として祭り上げられてしまったのですから、【　D　】つままれたような気持ちだったのではないでしょうか。

五郎右衛門は、後日また評定所に呼び出されました。そして老中、奉行らが居並ぶ中、将軍の朱印状が手渡されました。それには、五郎右衛門が孝行者で行いもよく、村人の助けにもなっているため、いま作っている田畑九十石を永久に授ける、つまり永久に年貢を免除する、と書かれていました。

江戸時代、孝行者に与えられた褒美(E)の品には、どのようなものがあったでしょうか。落語や講談では、孝行者や善人に下し置か

れる褒美は「青緡五貫文」というのが決まり文句になっています。青緡というのは、麻でできた縄を紺色に染めたものです。これで寛永通宝のような穴のあいた銭を通して束ねます。千枚で一貫文。五貫文だと現代ではだいたい十二万円くらいの価値になるかと思います。ただ実際に江戸時代に書かれた孝子伝を読んでいても、「青緡五貫文」という言葉はあまり見かけることがありません。「金そこばく」等と書かれることがほとんどです。孝行者に与えられる褒美は、金銭ばかりとは限りません。米が与えられる場合も多々ありますし、羽織地の絹や綿などが与えられることもあります。

褒美として高額なものでは、土地がありました。これはもちろん稀なケースです。たとえば享保十一年(一七二六)六月、陸奥国磐井郡東山門崎村(現・岩手県一関市)の喜助は領主から田畑三十石を与えられました(『官刻孝義録』巻十五)。その他には身分や扶持・年貢に関わるものもありました。孝行者自身には帯刀を許す(つまり武士として取り立て)、その子孫には末代まで苗字を許す、という例もいくつか見られました。また、親が生きている限りにおいて扶持米を与えたり、本人が生きている間の課役を免除するということもありました。身分や扶持・年貢に関わるような褒美の場合、孝行者や親が生きている限り、というのが一つの基準だったようです。

これらの例からすると、五郎右衛門に対してなされた表彰が、いかに破格なものだったかがわかるでしょう。永代、すなわち徳川による支配が続く限り、田畑九十石の税を免除する――すなわちこの田畑で作ったものはすべて自分のものにできる、というのは他にほとんど例を見ません。岡山藩で柴木村(現・岡山県浅口市)の甚介という人物が、岡山藩主の池田光政から同様の永代にわたる褒美を受けた例が思い当たる程度です。さすがは徳川幕府から孝行をもって表彰された初めての人物、褒美も桁違いだったという訳です。

いったん故郷の駿河へ戻った五郎右衛門は、六月にもう一度江戸へ招かれました。そこでは将軍・徳川綱吉へ目通りを許され、また綱吉の生母や、綱吉一子・徳松に面会しました。初回の江戸行きでは、五郎右衛門が面会した相手は老中や勘定奉行どまりでした。おそらくその時は、まだ孝行者だと確定した訳ではなかったからでしょう。しかし今回は幕府が初めて表彰した孝行者として、相応の扱いを受けています。

なかでも綱吉が当時四歳の息子・徳松に会わせたのは興味深いことだと思います。孝行者に自分の子供を引き合わせて「お前もこんな孝行者になれよ」と言うのは、現代ではちょっと違和感があるかもしれませんが、当時としては自然な振る舞いだったことでしょう。ただこの徳松は、父・綱吉の願いむなしく、翌天和三年(一六八三)に五歳で没してしまいました。

この滞在中、幕臣・天野弥五右衛門の計らいによって宴席が設[d]けられました。そこには幕府の絵師の狩野柳雪秀信(かのうりゅうせつひでのぶ)、儒臣・林鳳岡(ほうこう)らも同席していました。そこで五郎右衛門の似顔絵が描かれ、鳳岡の賛(絵画などに付す詩歌)が書き付けられました。

この宴席において描かれた五郎右衛門の肖像画は現存し、今は国立公文書館に収蔵されています(『思忠志集』)。五郎右衛門は緊張した面持ちで平伏[e]していますが、地方の一庶民が江戸へ招かれて表彰され、さらに幕府と関わり深い絵師や儒者に一席設けられたら、リラックスせよという方が無理かもしれません。

また九月には、同席していた林鳳岡によって五郎右衛門の伝記「孝子今泉村五郎右衛門伝」(漢文)が書かれました。孝子が表彰されると、その伝記、すなわち孝子伝が書かれます。ただし、すべての孝子について書かれたという訳ではありません。多くは表彰の品が渡されればそれで終わりです。伝記が書かれるのは、表彰された孝子をよりいっそう顕彰しようとする大名などが藩の儒者に命じて書かせたり、篤志家が自発的に書いたり、その土地を訪れた学者が書き残したり、という場合に限ります。五郎右衛門の場合も、将軍・綱吉が孝子伝の作成を命じた訳ではありません。天野弥五右衛門という幕臣が、自主的に儒者にイライ[オ]して作らせたものに過ぎません。いわば弥五右衛門が個人的に作成して渡した記念品のような物だったと言って良いでしょう。

以上、孝子が発見されてから褒美を得るまでを確認しました。孝行者といえば、誠実に親と向き合うすがたが想像されるかもしれません。しかし表彰されるとなると、[G]周囲に巻き込まれ、振り回される要素が大変多いことに気づかされます。

＊勝又基『親孝行の日本史』(中央公論新社)より問題作成上、文書の一部を省略・変更しています。

問題

問1 ━━線ア～オのカタカナを漢字になおしなさい。

問2 ━━線a～eの漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問3 ━━線あ「それら」、い「これら」、う「それ」は、それぞれ何を指していますか。

問4 ┅┅線A「江戸時代に入ると、社会に対する儒教の影響力が格段に大きくなりました」とありますが、なぜですか。理由を述べている部分を本文から二十五字程度で抜き出しなさい。

問5 ┅┅線B「えてして」に近い意味を持っている語を次からすべて選び、番号で答えなさい。

1 相まって　2 しばしば　3 往々にして　4 ややもすると　5 おもむろに

問6 ┅┅線C「頓知噺のような結末」とありますが、具体的にはどのようなことですか。本文から五十字程度で抜き出しなさい。

問7 【 D 】に入れるのにふさわしいものを次から選び、番号で答えなさい。

1 鼻を　2 眉を　3 狐に　4 狸に

問8 ┅┅線E「褒美の品」として本文に挙げられているものを、それぞれ二字以内ですべて書き出しなさい。

問9　‐‐‐線F「褒美も桁違い」とありますが、具体的にどう「桁違い」だったのですか。

問10　五郎右衛門の「表彰の実態」を次のように一覧にまとめました。空所を埋めなさい。

いつ	できごと	関係者
一六八一年四月四日	取り調べ	巡検使
一六八二年二月二十九日	呼び出し	勘定奉行
【　1　】	江戸到着	
	取り調べ	【　2　】
後日	朱印状授与	老中・奉行
六月	面会	【　3　】・将軍生母・【　4　】
	宴席	天野弥五右衛門
	【　5　】作成	狩野柳雪・林鳳岡
九月	孝子伝作成	天野弥五右衛門・林鳳岡

問11　‐‐‐線G　孝子の表彰には「周囲に巻き込まれ、振り回される要素が大変多い」とあります。これについて本文から分かることを百五十字以上二百字以内でまとめなさい。